

見通しをもって 思いや意図を音楽に構成できる音楽科指導の工夫 —— 「記録する・伝える」までを意識した常時活動の取組を通して ——

長期研修員 石川 文俊

《研究の概要》

本研究は、小学校音楽科音楽づくりにおいて、つくった音楽のよさや面白さを「記録する・伝える」までを意識した「常時活動」の取組を通して、見通しをもって思いや意図を音楽に構成できる力を培うためのものである。具体的には、〔共通事項〕の内容を手がかりとして設定した「常時活動」を、音楽を構成するそれぞれの段階に生かすことで、音楽を記録したり伝えたりするまでの学習過程についての見通しをもって音楽づくりに取り組むことができる。そして、自ら構成した音楽に込められた思いや意図、音楽のよさや面白さを感じ取ったり伝え合ったりすることのできる活動を行った。

キーワード 【音楽—小 音楽づくり 思いや意図 常時活動 〔共通事項〕】

群馬県総合教育センター

分類番号：G05-03 平成26年度 252集

I 主題設定の理由

新学習指導要領では、「豊かな心」を育むことの必要性や「生きる力」を育てることの重要性が示された。音楽教育の中では、音楽をつくる楽しさを体験させる観点から、「創作活動」を「音楽づくり」と位置付け、音の面白さに気付くとともに、音を音楽へと構成する「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」の面白さに触れるようにすると述べられている。さらに、表現及び鑑賞の活動の支えとなる〔共通事項〕を指導事項として示し、「音楽を特徴付けている要素」「音楽の仕組み」「音符、休符、記号や音楽にかかわる用語」を、音楽活動を通して理解し活用していく能力を育てていくことが大切だとした。「音楽活動を通して理解する」ためには、知識を音楽の学習活動の中で実際に生かせることが必要になる。そのため、「はばたく群馬の指導プラン」では、〔共通事項〕に示された「音楽の仕組み」を手がかりにし、児童が思いや意図をもって音楽を構成することの重要性が示され、表現に生かすための具体的な取組を求めている。

平成23年度と平成24年度に実施された「ぐんまの子どもの基礎・基本習得状況調査」の結果では、曲想と音楽の要素の関わりを音楽記号や楽譜と関連付けて自分の言葉で表現したり演奏したりすることに課題が見られた。そのため、表現及び鑑賞の学習において、曲想と要素の働きとの関わりを感じ取れるような指導を、すべての音楽活動に位置付けることが必要であることが示された。研究協力校では、表現及び鑑賞と〔共通事項〕で示された「音楽を特徴付けている要素」を積極的に関わらせる活動を実践してきた。これにより、要素の働きやそれらの生み出すよさや面白さを、表現及び鑑賞の中で生かせるようになってきた。しかし、「音楽づくり」では「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」を生かして表現の工夫をすることや、工夫した表現のよさや面白さを意識することができずに至らなかった。音楽づくりの指導でも、「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」と思いや意図を、具体的に関わらせる方法を見出すことが難しいと感じていた。

そこで、思いや意図を音楽に構成するために、「音楽を特徴付けている要素」だけでなく、「音楽の仕組み」としての〔共通事項〕を取り入れた「常時活動」を生かした実践を行いたい。授業導入に「常時活動」を設定し、そこに「音楽の仕組み」を意識した活動を取り入れることで、音楽づくりに「音楽の仕組み」の醸し出すよさや面白さを実際に経験し、無理のない形で自然に感じ取ることができるようにする。そして、音楽の構成にどんな要素や仕組みを取り入れるとどんな働きが生み出されるかを、題材の学習以外のところでも意識できる音楽経験を積み重ねられるようにしたいと考えた。また、つくった音楽のよさや面白さを「記録する・伝える」ために、「常時活動」としてリズムカードを生かした活動や、音符・記号の読み書きにつながる活動を設定していく。これにより、音楽に構成した自分の思いや意図を、演奏としてだけでなく再現できる楽譜としての形として残すことができ、表現したり伝え合ったりすることにつながると考えた。以前から取り組んでいた「常時活動」では、音符やリズム、音色などの「音楽を特徴付けている要素」を取り入れた活動は十分行えたが、「音楽の仕組み」を「常時活動」に取り入れることが難しかった。「音楽の仕組み」の働きが生み出すよさや面白さを感じ取るには、表現及び鑑賞など音楽活動を通して理解することが必要であり、短時間の「常時活動」では、そのよさや面白さに気付くことができても、実際の表現に生かすことが難しいからである。そのため「常時活動」は、表現及び鑑賞などの音楽活動のねらいと関連を図り、実際の表現活動に生かすことができる活動や、音楽活動のねらいを達成するための活動として設定していく必要がある。

本研究は、つくった音楽を「記録する・伝える」までを意識して設定した「常時活動」の取組を生かし、見通しをもって思いや意図を音楽に構成できる力を培うためのものである。音楽づくりの際、「常時活動」での経験を手がかりとして、〔共通事項〕に示された内容をどのように取り入れて音楽を構成するか、また、構成した音楽をどのような形で記録したり伝えたりしていくかなど、つくる音楽の形やそれに至る方法を考えるなど、音楽づくりに見通しをもって取り組めるようにする。その中で、自らの思いや意図を音楽に構成するだけでなく、構成した音楽のよさや面白さを感じ取ったり伝え合ったりすることにつながられると考えた。そして、直接的な音楽経験を通して身に付けた「音楽活動の基礎的な能力」を生かし、生涯にわたって「生きる力」を育てていくことができるようにしていきたいと考え、

本主題を設定した。

II 研究のねらい

音楽づくりにおいて、見通しをもって思いや意図を音楽に構成するために、「記録する・伝える」までを意識した常時活動の取組を生かすことの有効性を明らかにする。

III 研究仮説（研究の見通し）

1 音楽づくりのための思いや意図をもつ

音楽づくりの導入の段階において、〔共通事項〕に示された内容をもとにした「常時活動」の経験を生かし、音楽づくりの見通しをもつことにより、音楽づくりのための思いや意図を明確にもてるようになるであろう。

2 自分の思いや意図を音楽に表す

音楽を構成する段階において、〔共通事項〕に示された内容を取り入れた「常時活動」の経験を生かし、音楽の構成や表現の工夫をすることにより、自分の思いや意図を音楽に表すことができるであろう。

3 思いや意図を共有し合う

つくった音楽を表現したり伝え合ったりする段階において、〔共通事項〕に示された内容を取り入れた「常時活動」での経験を生かし、楽譜として記録した音楽を表現する喜びを味わい、そのよさや面白さを伝え合うことにより、思いや意図を共有し合うことができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 見通しをもって思いや意図を音楽に構成できるとは

思いや意図を音楽に構成できるということは、音楽に構成したいという思いや意図をもって発想した言葉に、自分たちが身に付けてきたリズムや音符・休符などの〔共通事項〕に示された「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」の働きが生み出すよさや面白さを取り入れて、音楽を構成することができるようになることである。その際、「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」をバランスよく取り入れることで、即興的な表現にはない、音楽的に意図されたよさや面白さを表現することにつ

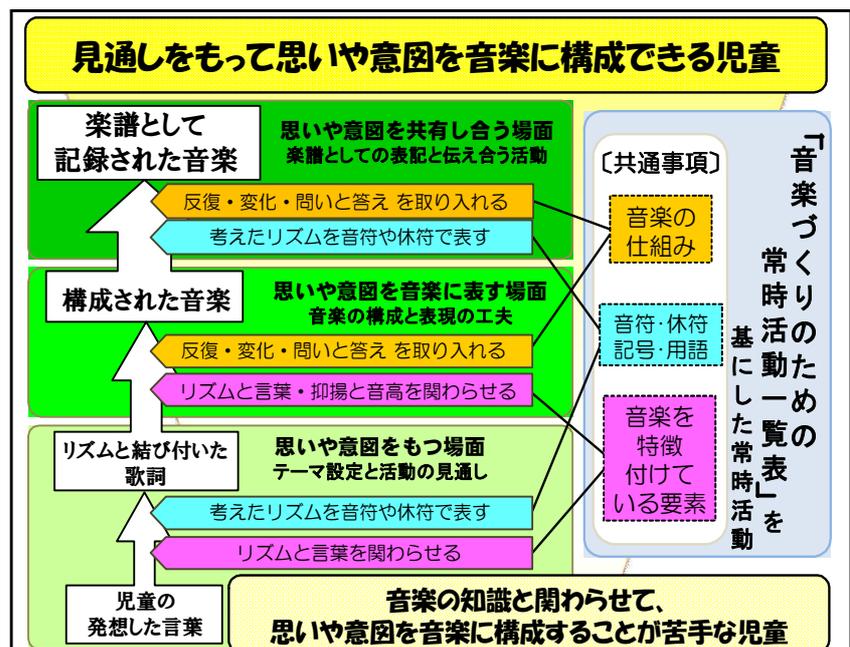


図1 研究構想図

ながる。また、音楽づくりへの見通しをもつということは、つくる音楽の形やそれに至る方法を考えることである。今回の音楽づくりでは、テーマに沿って発想した歌詞を音楽へと構成した作品をイメージすることや、そこに至るまでの方法を考えたりすることに、「常時活動」の経験を生かすことで、音楽づくりへの見通しがもてるようにしていく。そのため「常時活動」は、〔共通事項〕に示された内容を生かし、音楽づくりの手がかりとなるような活動として設定する。そして、活動を提示する方法や順序・活動の配列を工夫し、音楽づくりのどの場面でどの経験を生かすと、自分の思いや意図を音楽の表現に生かすことができるのかが分かるようにした。さらに、自ら構成した音楽を演奏したり発表したりするための楽譜としての記録に、「音符・休符・記号や音楽にかかわる用語」を取り入れた「常時活動」を生かしていく。

このように、児童の発想した言葉が構成された音楽へ、そして楽譜として記録された音楽に至るまでの方法や一連の流れと、〔共通事項〕に示された内容をもとにした「常時活動」を関わらせることにより、見通しをもって思いや意図を音楽に構成できるようになると考える。

(2) 常時活動とは

「常時活動」とは、音楽の授業の導入段階における5～10分程度の短時間で行う活動であり、〔共通事項〕に示された「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」のよさや面白さを経験し、無理のない形で自然に感じ取れることができるようにする活動である。「常時活動」では、題材の学習以外で〔共通事項〕に示された内容と実際の音楽活動とを関わらせていく。また、児童の発達段階に応じた内容で分類し、〔共通事項〕に示された内容と「常時活動」を関わらせた「音楽づくりのための常時活動一覧表」を活用する。そして、「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」を生かした活動を毎時間継続して指導する。「常時活動」で行うリズムづくりやリズム表現では、音符カードを活用することで、記譜や読譜と関わらせていく。

「常時活動」を実際の音楽づくりと関わらせる際、「常時活動」を積み重ねることで得た経験や感覚を音楽の構成に生かすことで、思いや意図を表現と関わらせることができる。また、〔共通事項〕に示された内容の名称や意味を知ることだけでなく、それらの働きやよさ、面白さを感じ取ったり、表現及び鑑賞の各活動に用いたりすることができる。そして「常時活動」は、児童の意欲を高めながら楽しく誰もが取り組める授業の導入としてだけではなく、〔共通事項〕に示された要素の意味や働きを理解するきっかけとなる計画的な活動にしていくことができる。「常時活動」を児童の発達段階や指導内容に応じて計画的に指導していくためにリストアップした「音楽づくりのための常時活動一覧表」を活用することで、思いや意図と〔共通事項〕を関連付けた音楽づくりへと発展させることにつなげていくことができる。

今回活用した「音楽づくりのための常時活動一覧表」は、主に低学年から高学年までのそれぞれの発達段階に応じ、音楽づくりの充実を目指して様々な経験ができるように設定したものである。そのため「常時活動」は、表現（歌唱や器楽）、鑑賞など音楽活動全般を充実させることよりも、主に音楽づくりに生かすことのできる活動を中心に設定している。また「音楽づくりのための常時活動一覧表」には、〔共通事項〕に示された「音楽を特徴付けている要素」と「音楽の仕組み」のすべてを網羅するように活動を設定している。そのため今回の研究で行った音楽づくりでは、扱う〔共通事項〕の内容を含んだ活動を「音楽づくりのための常時活動一覧表」から取り出すことにより、〔共通事項〕を取り入れた音楽づくりに必要な音楽経験を「常時活動」で積み重ねることができる。

2 先行研究とのつながり

群馬県総合教育センターの先行研究における、表現（音楽づくり）分野の課題として、知覚・感受したことを言葉で表すことや、作品を記録するための記譜や音符と関連した指導についての改善や工夫が必要であることが示されていた。また、「常時活動」について発達段階に応じた継続的な指導や〔共通事項〕との関連が求められるということについても挙げられていた。このようなことから、音楽づくりでは、思いや意図と〔共通事項〕を関わらせた表現活動を目指し、「常時活動」

に取り入れた活動を生かして、自分が表現した音楽を言葉や図、記号・音符などを使って記録したり伝えたりすることができる音楽科指導の工夫を目指したいと考えた。

V 研究の計画と方法

1 授業実践の概要[1] (常時活動を生かした音楽づくり 高学年)

(1) 実践計画

対 象	研究協力校 小学校第6学年 67名
実践期間	平成26年10月20日～11月14日 6時間
題 材 名	「学校行事や自分たちの生活をテーマにしたふしづくりをしよう」
題材の目標	自分の発想した言葉の語感をもとにして、音符やリズムの組合せと音楽の仕組みを生かしたふしづくり活動ができる。

(2) 抽出児童

A	常時活動では、正確な譜読みやリズム表現ができ、リズムの変化にも十分に対応できる。「音楽の仕組み」を生かした即興でのリズム打ちやふしあそびは得意だが、音楽の要素を意識した音楽づくりの経験は少ない。音楽づくりの際には、常時活動で積み重ねた経験や感覚を生かすことで、語感に照らし合わせた音符の組合せを考えたり、音楽の要素や仕組みを取り入れたりするなど、思いや意図と表現を関わらせることができるようにしたい。
B	常時活動に意欲的に取り組んではいるが、自分から表現したり考えたりしようとすることに課題がある。音楽づくりの際には、音符の組合せを考えたり語感との関わりを考えたりすることはできるが、音符に合わせたリズム打ちに課題がある。常時活動で積み重ねた経験を直接的に生かすことで、音楽づくりについての一連の流れについて見通しをもてるようにし、自分の思いや意図を表現の中に取り入れられるようにしたい。

(3) 検証計画

	検証の観点	検証の方法
見通し1	音楽づくりのための思いや意図をもつ場面において、言葉とリズムを関わらせた「常時活動」を生かして歌詞を発想することは、思いや意図を生かして歌詞をリズム化することや、「音楽の仕組み」と歌詞や音符、休符を関わらせるなど、音楽づくりの見通しをもつために有効であったか。	○学習活動の観察 (常時活動や授業中における観察) ○ワークシートへの記入事項の考察
見通し2	音楽で思いや意図を表す場面において、音符カードや語感に照らし合わせてつくったふしに、表現及び鑑賞で学習した「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」を取り入れるために、「常時活動」での経験を生かして音楽を構成することは、思いや意図を曲の雰囲気を生かすために有効であったか。	○学習活動の観察 (具体的な操作活動や演奏の様子) ○ワークシートへの記入事項の考察
見通し3	思いや意図を共有する場面において、構成した音楽を記録したり伝え合ったりするために、音符や休符などの記号に関わる「常時活動」を取り入れた工夫を行うことは、自分たちで構成した音楽のよさを表現する喜びや、伝え合う喜びを味わうために有効であったか。	○ワークシートへの記入事項の考察 ○グループの活動や話合いの観察

(4) 指導と評価の計画 (全6時間予定) (常○：資料28ページ「音楽づくりのための常時活動一覧表」参照)

評価	音楽への 関心・意欲・態度	テーマに合った言葉を想起したり、思いや意図をもってふしづくりをしたりする学習に進んで取り組もうとしている。
	音楽表現の	ふしの構成や組み立てなど、[共通事項]に示された「音楽を特徴付けている要素」や

規 準	創意工夫	「音楽の仕組み」と関連付けた工夫をし、ふしづくりにおいて自分の思いや意図をもっている。	
	音楽表現の技能	語感を生かしたり「音楽の仕組み」を取り入れたりするなど、基礎的な技能を身に付けて、つくり出したふしやリズムを表現したり、音を音楽に構成したりしている。	
時 間	過 程	伸ばしたい資質・能力	
		活用させたい 〔共通事項〕等	思考力・表現力等 (生かす常時活動やその内容)
第1時	課 題	・音符やリズム、イントネーション、発音	・児童が言葉を想起しやすい日常の事柄や行事など、身近な題材を班ごとにテーマとして設定した言葉集め。(常⑤⑥)
		・音符やリズム、イントネーション、発音、拍、音高	・リズムに変えることを視野に入れた、歌詞の選択や組み合わせを考えられるようにするためのリズムづくり。(常⑱)
第2時	把 握	・音符やリズム、拍、音高、フレーズ	・想起した歌詞に合わせてリズムカードを並べたり、音の高さを表すために磁石等を使った操作活動を取り入れたりすることによる音の選択。(常⑮⑯⑳)
		・音符やリズム、拍、音高、フレーズ	・話し合いを通して気付いた、音楽の仕組みを生かしたリズムの組合せの設定。(常⑦⑧)
第3時	課 題	・音符やリズム、拍、音高、フレーズ	・音楽の仕組みや要素を取り入れることで、自分が意図した曲の雰囲気やふしの表現に生かしているかを確認する演奏。(常⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲)
		・音符やリズム、拍、音高、フレーズ	・自分たちの曲のよさや面白さを伝え合い、できたふしのよさを共感し合う表現活動。
第4時	追 究	・音符やリズム、拍、音高、フレーズ	・ふしを再現可能な楽譜として班ごとに完成させ、聴き合ったり演奏し合ったりすることで、よさや面白さに気付けるようにする。
		・音符やリズム、拍、音高、フレーズ	・音楽の仕組みや要素を取り入れた演奏を、表現したり音を音楽に構成したりしている。
第5時	ま と め	・音符やリズム、拍、音高、フレーズ	・音楽の仕組みや要素を取り入れた演奏を、表現したり音を音楽に構成したりしている。

2 授業実践の概要〔2〕 (常時活動を生かした音楽づくり 低学年)

(1) 実践計画

対 象	研究協力校 小学校第2学年 21名
実 践 期 間	平成26年10月20日～11月14日 6時間

題材名	「リズムに合わせたおはやしづくりをしよう」
題材の目標	音符やリズム、音の組合せを生かしたおはやしづくりができる。

(2) 抽出児童

C	常時活動でのリズムづくりやリズム表現に、積極的に取り組んでいる。即興的なリズムづくりやリズムの変化にも対応でき、正確に表現したり演奏したりすることができる。音楽づくりでは、音楽の要素や仕組みについて意識して取り組んだ経験が少ないので、常時活動で取り組んだ経験を生かし、工夫した表現に結び付けられるようにしていきたい。
D	常時活動でのリズム表現には、積極的に取り組むが、音符の読みとリズム打ちに時間がかかり、やや正確性に欠ける部分がある。音楽づくりでは、語感とリズムの関係をしっかりと意識できるよう、常時活動での取組を想起できるようにすることで、思いや意図を表現に生かした音楽づくりへの見通しがもてるようにしていきたい。

(3) 検証計画

	検証の観点	検証の方法
見通し1	音楽づくりのための思いや意図をもつ場面において、おはやしのリズムや歌詞を発想させる際、言葉とリズムを関わらせた「常時活動」を生かすことは、思いや意図を関わらせた歌詞のリズム化や拍に合った言葉への言い換えをするなど、音楽づくりへの見通しをもつために有効であったか。	○学習活動の観察 (常時活動や授業中における観察) ○ワークシートへの記入事項の考察
見通し2	音楽で思いや意図を表す場面において、音符カードや語感に照らし合わせてつくったふしに、音高を取り入れた「常時活動」を生かして音楽を構成することは、思いや意図を曲の雰囲気を生かすために有効であったか。	○学習活動の観察 (具体的な操作活動や演奏の様子) ○ワークシートへの記入事項の考察
見通し3	思いや意図を共有する場面において、自分の構成した音楽に活用した「音楽の仕組み」についての表記を工夫することは、自分たちで構成した音楽のよさを表現する喜びや、伝え合う喜びを味わうために有効であったか。	○ワークシートへの記入事項の考察 ○グループの活動や話合いの観察

(4) 指導と評価の計画 (全6時間予定)

(常○：資料28ページ「音楽づくりのための常時活動一覧表」参照)

評価 規 準	音楽への 関心・意欲・態度	テーマから発想した言葉に合わせたリズムの組合せを考え、思いや意図をもってふしづくりの学習に取り組もうとしている。	
	音楽表現の 創意工夫	リズムや音の構成に、〔共通事項〕に示された「音楽の仕組み」を関連付けて工夫し、ふしづくりにおいて自分の思いや意図をもっている。	
	音楽表現の技能	語感やリズムの特徴に気付いたり、音楽の仕組みを生かしたりして、音を音楽にしている。	
時間 過 程	伸ばしたい資質・能力		主な学習活動 (◇評価項目と【観点】)
	活用させたい 〔共通事項〕等	思考力・表現力等 (生かす常時活動やその内容)	
第1 時 課 題	・音符やリズム、 音色	・八分音符と四分音符の特徴について考えたり、使う楽器の音色の特徴を生かしたりする演奏。(常④⑤⑥)	・自分の好きな楽器を選び、例示された「も とになるおはやし」を演奏する。 ◇自分の好きな楽器や音色を選び、おはやし を演奏しようとしている。【関】
	・音符やリズム、 イントネーション	・言葉を想起しやすい身近なテーマに沿って発想した、リズムパ	・おはやしにするための1小節4拍になる言葉 を考え、手拍子で表現し、組み合わせる。

第2時	把握	ン ・音符やリズム、拍、音高、フレーズ	ターンの想起。(常⑨⑩) ・語感を生かした音符の選択と、操作活動を取り入れることによるリズムの組合せ。また、グループでの話し合いを生かした演奏や表現活動。(常⑪⑫)	◇リズムや音の構成に〔共通事項〕に示された「音楽を特徴付けている要素」を関連付けて工夫し、おはやしづくりに思いや意図をもっている。【創】
第3時		・音符やリズム、拍、発音	・「まつりのおはやし」にふさわしい音を使った音の選択とそれを生かした演奏や表現活動。(常④⑤⑥⑨)	・組み合わせたリズムに「ド・レ・ファ」を当てはめ、つくったふしを演奏する。 ◇完成した楽譜を見ながら、拍の流れに乗って楽器を演奏したり、リズム打ちをしたりすることができる。【技】
第4時	課題追	・音符やリズム、拍、音高、フレーズ、問いと答え、変化、反復	・常時活動で経験した「問いと答え（呼びかけ）」を取り入れた「音楽の仕組み」による音楽の構成。(常⑤⑥⑦⑧⑨)	・自分たちでつくったおはやしを演奏を音楽の仕組みを使って工夫することができる。 ◇自分たちのつくったふしを組み合わせた演奏が生み出すよさや面白さを感じ取りながら、どのようにおはやしを構成するかについて自分の思いや意図をもっている。【創】
第5時	究	・音符やリズム、拍、音高、フレーズ、問いと答え、変化、反復	・常時活動で経験した「問いと答え（対照）」を取り入れた「音楽の仕組み」による音楽の構成。(常⑤⑥⑦⑧⑨)	・自分たちでつくったおはやしの演奏を音楽の仕組みを使って工夫することができる。 ◇自分たちのつくったふしに取り入れた仕組みが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、どのようにおはやしを構成するかについて自分の思いや意図をもっている。【創】
第6時	まとめ	・音符やリズム音高・問いと答え ・変化・反復・強弱	・できた楽譜を演奏したり聴き合ったりする活動を取り入れることによる、よさや面白さを伝え合ったり共感し合ったりできる活動。	・おはやしを演奏したり聴き合ったりすることで、表現のよさや面白さを感じ取ろうとしている。 ◇自分たちで構成したおはやしを見ながら、拍の流れに乗って楽器を演奏したりリズム打ちしたりできる。【関】

VI 実践の結果と考察

「常時活動」の取組をもとに、6年生では「6年生の活動をテーマにしたふしづくりをしよう」の題材を設定し、「語感を生かしたふしづくり」を目指して実践授業[1]を行った。また、2年生の「リズムあそび」の題材では「じぶんたちのだいすきな おはやしをつくろう」をめあてて実践授業[2]を行った。児童の思いや意図を音楽に構成していくために、〔共通事項〕に示された内容を生かした「常時活動」を、音楽づくりのそれぞれの場面で生かすことの有効性を異学年で検証した。

1 実践授業[1] 6年生

(1) 思いや意図をもつ場面<テーマ設定と活動の見通し>

① 結果

音楽づくりでは、『6年生の活動をテーマにしたふしづくりをしよう』を題材のテーマとし、「つくった音楽を自分たちの卒業記念作品にしよう」をめあてて取り組んだ。

抽出児童Aはグループで選んだ「修学旅行」をテーマに、「のぼるのがたいへんだった つるが

おか八幡宮」とイメージマップに記述した(図2)。拍に合わせて歌詞に変化させた際には、鶴岡八幡宮の「つるがおか」だけを取り出し、「つるがおかー」と最後の言葉を伸ばし休符を付け加えてワークシートに記述した(図3)。

「様子を表す言葉・声や音・気持ちを表す言葉・動きを表す言葉」を考える際には「たいへん」の部分から「ハーハーゼーゼー」というリズムに合った言葉を想起し、「めちやくちつかれた」と歌詞の文を締めくくった。最後に、歌詞に合ったリズムを手拍子し、考えたリズム通りの音符カードをワークシートに貼ることで、自分で考えた歌詞をリズム化することができた(図4)。

抽出児童Bは、グループで選んだ「臨海学校」をテーマに、「すいか割りでスイカがうまかった」とイメージマップに記述した(図5)。拍に合わせて歌詞に変化させた際には、スイカ割りのことを「めかくしぐるぐる すいかわり」と変化させてワークシートに記述した(図6)。「様子を表す言葉・声や音・気持ちを表す言葉・動きを表す言葉」を考える際には、「ぐるぐる」の部分を取り出し、「ぐる」と「ぐる」の間に休符を入れた歌詞を考えた。最後に、歌詞にあったリズムを手拍子し、考えたリズム通りの音符カードをワークシートに貼ることで、自分が考えた歌詞をリズム化することができた(図7)。

「常時活動」では、その日の天気や気候・そのときの児童の様子や気分などをテーマにした言葉が出てくるような活動に取り組んだ。また、児童が想起した拍の合わない言葉を、音楽づくりのために必要な拍数に合わせた歌詞に変換してリズム化する活動に取り組んだ。自分が作品にしたい言葉を集めて歌詞にした後、ふしのリズムに合わせて歌詞を書き換え、今回の音楽づくりに必要な歌詞を考えた。その後、歌詞を言いながら手拍子することでリズム化し、休符を含む音符カードを使ってリズム譜をつくった。

今回の音楽づくりでは、「常時活動」で取り組んだ言葉あそびやリズムづくり・リズム表現の活

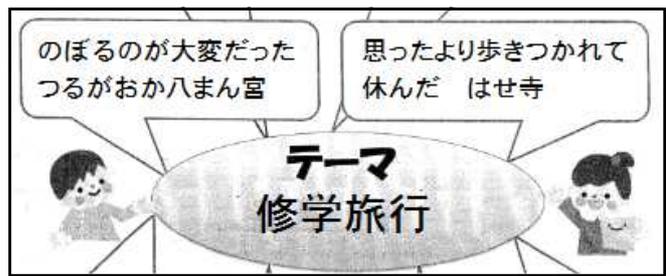


図2 児童の書いたイメージマップ



図3 イメージマップから変化させた拍に合う言葉



図4 変化させた拍に合わせてカードで表したリズム



図5 児童の書いたイメージマップ

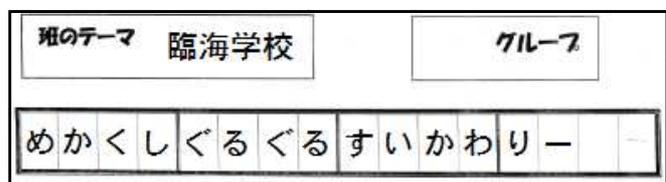


図6 イメージマップから変化させた拍に合う歌詞



図7 様子や動きを取り入れて変化させたふしとリズム

動を生かし、テーマをもとにした歌詞づくりやリズム譜づくりがスムーズになるようにした。これらの「常時活動」を生かし、歌詞をリズム化することができた児童は88%（59名）で、自力でリズム化するまでに至らず教師のアドバイスを受けることで歌詞を決定することができた児童は11%（8名）であった。

② 考察

学校生活の思い出をテーマに設定することに加え、作品を卒業の記念になるものにしたと考えて活動をスタートさせた。授業後のワークシートには、ほとんどの児童が「自分の作品が卒業記念になることが楽しみだ」「思い出を歌にしてみたい」と答えていた（図8）。このことから、音楽づくりのテーマ設定が、作品を完成させたいという児童の意欲を高めることにつながったと考える。また、自分たちの思い出や活動を「常時活動」での経験を生かして歌詞にしたりリズム化したりする中で、想起した歌詞を旋律という形で音楽にするという、音楽づくりへの見通しをもつことにつながったと考える。

抽出児童Aが「のぼるのがたいへんだつた つるがおか八幡宮」を「つるがおかー」と伸ばして書き換えたのは、「つるがおかはちまんぐう」がひらがな11文字だったため、拍に合わせてマスに入れると調子の悪い感じになってしまうことを、「常時活動」での経験で気付くことができるようになっていたからだと考えられる。音楽づくりの授業の際には「授業の始め（常時活動）でやったときのように、歌詞を変えたり短くして使ってもいいんだよ」と伝えたことで、鶴岡八幡宮の「つるがおか」を「つるがおかー」のように伸ばし、拍に合わせた歌詞に変化させることができたと考える。次に、「たいへんだつた」様子を強調するように歌詞を変化させていく際には、「大変だった様子を表現したいのなら、自分の動きやそのときの気分を表す言葉を付け加えてみたらどうかな？」と投げかけた。これにより、「あのとき階段を登っていて息が切れたんだよね」と修学旅行のときのことを思い出すことができ、さらに「ハーハーゼーゼー」を付け加えて自分の様子や気持ちを表現することができたと考えられる。最後に、歌詞に合わせて手拍子をして考えたリズム通りの音符カードをワークシートに貼る際には、自分のつくったリズムを手拍子できるか質問したところ、「いつも（常時活動）と同じだから難しくないよ」と答え、歌詞を言いながら手拍子をして見せた（図9）。このことから抽出児童Aは、「常時活動」を生かした歌詞のリズム化がスムーズに行えるようになっていていると考えられる。

抽出児童Bが「スイカわりで スイカがうまかった」の歌詞を、リズムに合わせた歌詞に変化させた際、「スイカ割りのときの動きや様子をうまく取り入れてみたら面白い歌になりそうだね」と投げかけた後、「めかくしぐるぐる すいかわり」という歌詞に変化させていた。このように変化させた理由について尋ねると、「スイカ割りをやっているときの動きを入れようと思った。動きで面白いのは始める前に目隠しをして回るところだったからこうしてみた」と答えた。取り入れたい動きの面白さを表すために、『ぐるぐる』という「反復」が含まれている言葉を選ぶことができたのは、「常時活動」で言葉の付け加えにより気持ちや様子を強調する経験を積み重ねたことが生かされた結果だと考える。さらに、『めかくしぐるぐる すいかわり』の中にある『自分の気持ちや様子』を表す言葉はどれだろう」という問いかけに対し『ぐるぐる』です」と答えた。「それならば『ぐるぐる』の様子の面白さを表すにはどのように音楽で表したらいいかな」という問いかけを受けて、「ぐるぐる」を「反復」の形式に当てはめるだけでなく、途中で休符を入れて間を

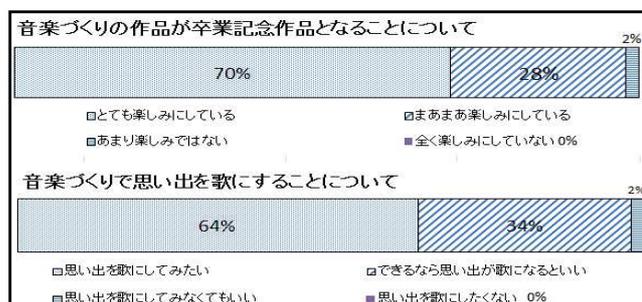


図8 卒業記念作品にすることについてのアンケート結果



図9 言葉をリズムで表している様子

開ける楽譜をつくった。「なぜ『ぐるぐる』の間に休符を入れたのか」と問いかけたところ、「休符を入れると『ぐるぐる』の部分が強調されると思ったから」と答えた。このように、自分のつくったふしに「音楽の仕組み」を取り入れた理由をリズムや休符と関わらせて説明することができたのは、「常時活動」の中で休符を入れてリズムを変化させる経験を積み重ねたからだと考えられる。

<思いや意図をもつ場面>に生かした「常時活動」は、1小節が4拍（八分音符が8個分）の長さになる言葉を使い、語感からリズム・イントネーションを導き出す活動を「音楽づくりのための常時活動一覧表」（別紙）をもとにして、段階を踏んで実践してきた。また、天気や気候・児童の様子や気分などを「常時活動」で扱うことで、自分たちの様子や気分を表す言葉の語彙を増やすことができるようにしてきた。この活動では言葉と音符を必ず関わらせるために、音符カードをもとにして考えることを徹底してきた。この「常時活動」を積み重ねることにより、活動の流れを「言葉」から「手拍子」そして「音符化」という、つくりたい音楽の形に至るまでの方法を児童が考えられるようにすることができた。そして、実際の音楽づくりでも、歌詞をリズム譜にするまでの過程を考えるための補助としての役割を「常時活動」が果たすことができたと考える。

実際のふしづくりでは、ほとんどの児童が、言葉を集めてつくった歌詞に合ったリズムをつくることや、その言葉に合ったリズムを音符で表現することができるようになった。音符化できなかったのは、ひらがなの数を拍に

小節をまたいだ歌詞に変化させた・・・6人
拍に合った歌詞に変化させられなかった・・・1人
休符を歌詞通りに入れられなかった・・・1人

図10 音符化できなかった理由

合わせて小節をまたいでしまったものや、シンコペーションのリズムになる歌詞に変化させたものだったからであった（図10）。音符に変換する活動は、常時活動で取り組んだ内容を十分に生かすことができていたが、自分たちがつくった文章から、拍数に合わせた歌詞に変換する作業については非常に時間がかかった。また、自分たちのテーマを決めてからイメージマップを完成させるまでや、テーマに関係した言葉を集めることにも多くの時間を費やした。学校生活の思い出をテーマにしているので、行事が終わった後の作文をもとにして言葉集めをしたり、総合的な学習の時間や学級活動との連携を図ったりすることで、「音やリズム」などの音楽の要素に関わらせにくい文字や言葉を操作する活動を減らし、音楽づくりの時間を確保することに有効だと考える。

(2) 思いや意図を音楽に表す場面<音楽の構成と表現の工夫>

① 結果

「常時活動」では、児童の発想した様々な言葉に、イントネーションをもとにして音高を設定する試行錯誤を繰り返した（図11）。さらに、音の上下に合わせて音高を設定し、実際にオルガンで表現することで、自分の想起した言葉から導き出した音高が、言葉のイントネーションと同じように聞こえるふしになっているかどうかの試行錯誤を繰り返した。実際の音楽づくりでは、始めに考えた歌詞をもとにした「もともになるふし」と、「もともになるふし」の歌詞に含まれる「様子や気持ち・音や声・気持ちや動きを表す言葉」を「変化」「反復」させた「工夫したふし」の二種類のふしを完成させることができた。



図11 音高を考える「常時活動」の様子

抽出児童Aは、修学旅行をテーマにしたふしを、次ページ図12のように完成させた。音高を設定する際には、自分で考えた歌詞を読みながら、手を上下に動かして試行錯誤を繰り返した。また、音高を考えながら「めっちゃめっちゃつかれた」の部分を「くったくたー」へと変更した。

抽出児童Bは、臨海学校をテーマにしたふしを次ページ図13のように完成させた。音高を設定する際には、抽出児童Aと同様に、手を上下に動かして試行錯誤を繰り返した。ふしが完成した児童同士で演奏し合っただけのふしのできあがり具合を確認する際、楽譜では休符で表してある部分に音符を

設定し、友達に演奏してもらっていた。

〔共通事項〕
で示された「音楽の仕組み」と関わらせていくため、「常時活動」で歌詞を変化させたり別の言葉で言い換えたりする際には、繰り返しの要素を含む「反復」に結び付けられるような言葉の言い換えや、伸ばす言葉や促音を含む言葉の言い換えを取り入れ、様々な言葉のリ

ズムを音符カードで表す経験を積み重ねた。また、ワークシートに「常時活動」の経験を生かすため、音符カードを縮小した同じ形のカードを活用し、自分の考えたリズム通りにカードを選びワークシートに直接貼り付けることで、リズムを決めることができるようにした。そして、使用する音を「ド・レ・ミ・ファ・ソ」の五音に制限し、鍵盤ハーモニカでの演奏が難しくならないことや複雑な楽譜にならないようにすること、調にとらわれないふしにするようにした。

② 考察

抽出児童Aが、自分で考えた歌詞を言いながら手の上下を繰り返すことにより、言葉のイントネーションから音高を考えることができたのは、「常時活動」で手を上下に動かして音高を設定した経験を生かしている様子と捉えることができる（図14）。また、「工夫したふし」の音高を考えている際、『めちやくちやつかれた』を『くったくたー』に直した理由を尋ねると、「前(常時活動で)やったときみたいにリズムも変わるし、その方が疲れた感じが出ると思ったから」と答えたのは、「常時活動」で行った「言葉を変えることで

気持ちや様子を強調する」経験を積み重ね、それを生かして音楽を構成することができたからだと考え。また、「疲れた感じ」を表すために、「ハーハーゼーゼー」のように同じ言葉や同じ音の長さの音符を「反復」させて交互に演奏する工夫を考えたり、使用する言葉を別の言葉で置き換えたりすることも、「常時活動」で経験した言葉を強調させる工夫を経験し、それを生かすことができたからだと考えられる。授業の終わりに、この児童が考えた「ハーハーゼーゼーくったくたー」の表現をクラス全員で試した。自分の考えた表現の工夫がどのように聴こえたか尋ねたところ、「鶴岡八幡宮の階段を登っているときの疲れた感じが思い出せる、面白い歌がつくれてとってもうれしい」と答えたことから、「常時活動」の経験を生かした表現の工夫をすることによるよさや面白さを実感できる音楽づくりが展開できたと考える。

図12 臨海学校をテーマにしたふし（左：もともになるふし 右：工夫したふし）

図13 臨海学校をテーマにしたふし（左：もともになるふし 右：工夫したふし）

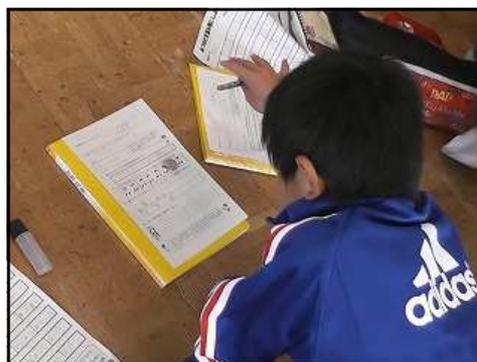


図14 手の上下で音高を考える様子

臨海学校をテーマに音楽づくりをした抽出児童Bも、音高を設定する際には、自分で考えた歌詞を言いながら手の上下を繰り返して試行錯誤を行っていたり、「くるくる」の部分で「反復」の仕組みを生かした表現の工夫を取り入れたりしていることから、抽出児童A同様、「常時活動」での経験を生かしていた様子と捉えることができる。

このように、音楽を構成する過程に「常時活動」を関わらせることで、音楽づくりと児童の思考の流れを「歌詞→リズム→音高→音符の記述」(図15)にすることができ、構成した音楽を楽譜として完成させることができたと考えられる。そして、抽出児童A Bに限らず、歌詞を変化させる際に「常時活動」で経験した「音楽の仕組み」を生かすことで、歌詞の変化と「音楽の仕組み」を関わらせて音楽を構成することにより、表現の工夫を行うことができたと考えられる。このように、自分たちで発想した歌詞をふしのリズムに合わせて変化させる

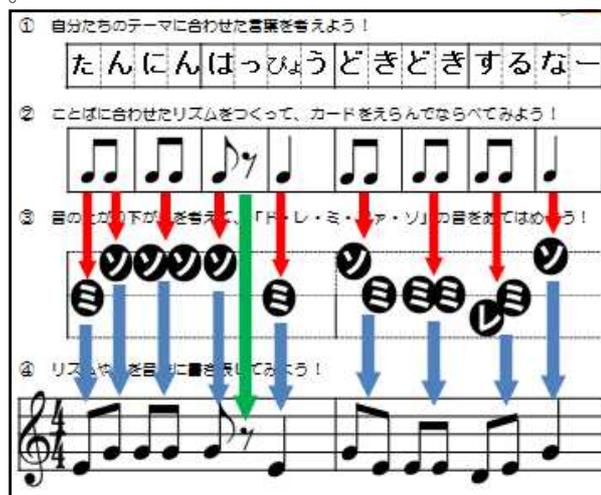


図15 音楽づくりの思考の流れを示したワークシート

ることや、「様子や気持ち・声や音・動き」を表す言葉と「音楽の仕組み」を組み合わせることに、「常時活動」で得た経験や感覚を生かすことで、音楽の構成や表現の工夫をすることに、思いや意図を生かすことができるようになったと考えられる。

(3) 思いや意図を共有し合う場面<楽譜としての表記と伝え合う活動>

① 結果

「常時活動」は、授業の始めに短時間で行う活動とし、四分音符や四分休符、八分音符や八分音符を組み合わせた音符カードを用いたリズムづくりや、そのリズムを手拍子で表現する活動、そしてそのカードを使い「音楽づくりのための常時活動一覧表」(別紙)をもとにした活動を実践した(図16)。また、音譜の読み方を「四分音符はター(タア)」「八分音符はタ」「四分休符はウン」「八分休符はン(ッ)」に統一し、音譜の読み方に関しては音楽の授業や今回の音楽づくりでも「常時活動」と同様の扱いを徹底した。また、授業の最後に、音符を書くことへの抵抗感を減らすために、音符を五線譜にバランスよく書くことができるまでの過程を経験できるワークシートを活用し「常時活動」として設定した(図17)。その際、音符には音の長さや、それを表すために五線の左側に詰めて書き右側のスペースで音がどこまで伸びるかを表す意味があることを伝えた。さらに「常時活動」のリズムあそびとして、つくったリズムを教師と児童全体で演奏する「呼びかけ」や、教師と児童(その日のリズムをつくった児童)で交互に演奏する「掛け合う形式」を経験し、一対複数や一対一の形式での演奏の経験を積み重ねた。



図16 常時活動の様子

この場面では、「工夫したふし」を複数の人数で表現するために「問いと答え」を取り入れて工夫した「グループで演奏するためのふし」を完成させることができた。抽出児童A



図17 音符を書く常時活動の記述

Bともに、「グループで演奏するためのふし」には、二人組で交互に演奏する形式と、グループ全員で演奏する形式の二種類を取り入れることができた。抽出児童Aは同じ音で同じリズムの旋律を交互に呼びかけ合う「問いと答え」の形式を、抽出児童Bは、自分が「ぐる」を演奏した後に、他のパートで「ぐる」を演奏して呼びかけ合うような「問いと答え」の形式を取り入れた楽譜を完成させた。楽譜として記述する際には、自分で考えたふしをすばやく正確に楽譜として記録することができた。

このように、「常時活動」で経験した「反復」を取り入れることができた児童は43名、「変化」を取り入れることができた児童は21名、「問いと答え」を取り入れることができた児童は58名であった。「グループで演奏するためのふし」に三人や四人で演奏する「問いと答え」の工夫をしたグループは、パートごとに音程を変えてハーモニーを付けるなど、演奏の工夫をすることに重点を置いたふしづくりを行った(図18)。

自分の楽譜を演奏したり他のグループの楽譜を演奏し合ったりする際には、グループで演奏の仕方を教え合ったり、楽譜をつくった児童に教えてもらったりしながら、演奏したり聴き合ったりする場を設定した。5月と11月に「楽譜を見ながら演奏することについての意識調査」を実施し比較したところ、楽譜を見ながら演奏することができる・だいたいできると答えた児童が31ポイント増加した(図19)。

5月と11月に「楽譜を見ながら演奏することについての意識調査」を実施し比較したところ、楽譜を見ながら演奏することができる・だいたいできると答えた児童が31ポイント増加した(図19)。

② 考察

抽出児童A Bともに、「工夫したふし」を「グループで演奏するふし」として完成させた際、表現の工夫とを取り入れた楽譜の記述ができた。抽出児童Aは、「ハーハーゼーゼー」の部分を実別パートに分けて交互に演奏する「呼びかける」形式を、抽出児童Bは「ぐる」の後に入れた休符を別のパートで演奏して交互に演奏し合う「呼びかける」形式を取り入れていた(図20)。二人とも「問いと答え」の形式を取り入れていたわけだが、なぜこのようにしたのかを抽出児童Bに質問したところ、「お互いにつくったふしを演奏し合う時間に、実際の演奏を通して休符の間が開くことが気になった。そこで、休符の部分友達に演奏してもらおうと面白さが増し、さらに『ぐるぐる』の感じを強調させられることが分かった。そのため、『グループで演奏するためのふし』にするときに楽譜を直した」と答えた。その工夫が「常時活動」と関わっているかどうかの質問に対しては、「み

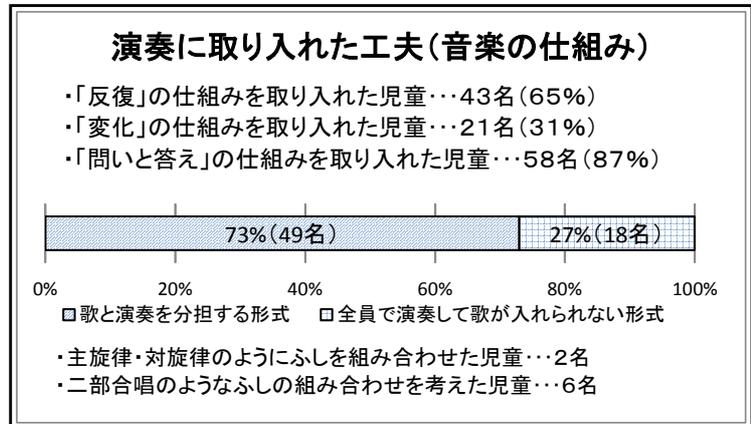


図18 活用した「音楽の仕組み」の内訳

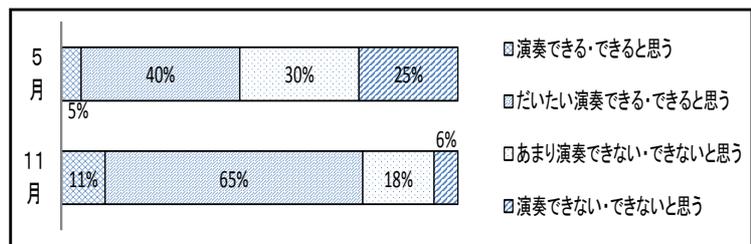


図19 楽譜を見ながら演奏することについての意識調査



図20 呼びかける形式の楽譜(上:A 下:B)

んなでやったとき(常時活動) みたいにしたら面白いかと思った」と答えた。抽出児童Aにも同様の質問をしてみたところ、「呼びかけるような『問いと答え』の形式を入れてみると様子がよく伝わるのではないかと考えた」と答えた。このことから、「常時活動」で教師と児童での掛け合う形式を経験し、「音楽の仕組み」を取り入れた表現の工夫の面白さを味わっていたことで、自分のふしを完成させる場面では、児童同士による「問いと答え」の呼びかける形式の面白さを表現に取り入れた楽譜に仕上げることができたと考えられる。

このような二人組での演奏の場合、四人グループの中で演奏していない二人の児童が歌を担当することができたが、三人や四人で演奏する工夫を取り入れたグループは、演奏をグループ全員で担当する形になってしまい、演奏に歌を取り入れることができなくなってしまった。また、パートごとに音程を変えると、歌にしたときに「二部合唱」のような形式になったり、「主旋律と対旋律」のようになっていたりして、作品自体が複雑化してしまったことで、歌として表現

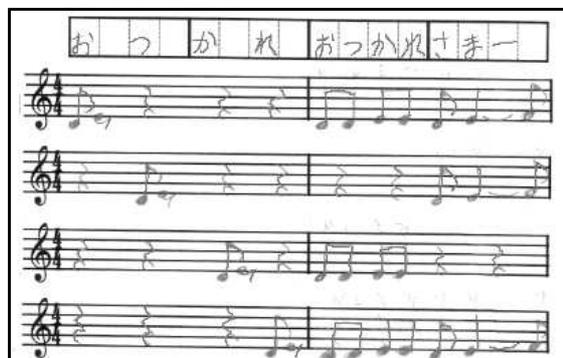


図21 歌うことのできなかつた楽譜の例

することが難しい作品になった(図21)。この演奏を聴いた児童は、「パートに振り分ける『音楽の仕組み』がそのときの様子を強調させている」と述べ、構成した音楽の思いや意図を感じ取っていた。しかし、自分たちの発想した歌詞を手がかりとした音楽づくりのためには、自分たちの発想した歌詞を歌として取り入れて「曲を工夫して演奏する」ことや、「自分たちの想起した歌詞を歌にする」ということを意識して活動に取り組んでいけるようにしていく必要があると考える。そのため、歌と演奏をグループの中で分担し、四人で分担して表現できる演奏の工夫を取り入れていくために、ワークシートや記述の仕方を工夫していくことが必要であった。

今回、ほとんどの児童が抵抗感なく音符の記述までできたのは、「常時活動」で音符を記述する経験を積み重ねる中で、音符の玉を五線上でどのように書いていけばよいかを段階を踏んで経験していくことができたからだと考えられる。抽出児童A Bが、自分たちでつくったふしをすばやく正確に五線上に記録できたのは、「常時活動」で経験した音楽づくりの流れを生かし、音符カードを使ったり音高を設定したワークシートを活用したりしたからである。また、ワークシートから楽譜にする際、音符が中央に寄ってしまったのは、ワークシートでできていた音符にするまでの縦の流れが、楽譜にはなかったからだと考えられる。そして、リコーダー等の器楽表現の譜読みでは楽譜の下に階名を記述していたにも関わらず、自分たちでつくったふしでは階名を書かずに読譜をして演奏できたのは、使用する音の限定によって複雑な楽譜にならないようにできたことだけでなく、ふしができあがるまでの過程を把握していたことが理由として考えられる。しかし、他のグループの作品を演奏し合う活動では、楽譜を読んでから演奏に取り組んだが、初見での演奏は難しく、演奏できるようになるまでに時間がかかった。他のグループの楽譜を演奏することについて抽出児童A Bに確認したところ、「自分たちでつくったもの(ふし)は分かっているけど、他の人がつくったもの(ふし)は読んだり吹いたりできるようになるのに時間がかかった。もう少し時間があればできると思う」と答えた。出来上がった作品を演奏し合う活動が成立するまでに時間がかかったのは、読譜力の向上及び楽譜を見ながら演奏する力の向上は見られるものの、楽譜を読んだ後に演奏の練習をする時間を確保することができなかつたためだと考える。そのため、他のグループの楽譜を演奏するには、ある程度の時間を確保し、自分たちで考えた楽譜を演奏するための練習時間と同じ程度の時間を確保することが必要であると考えられる。また、楽譜を見ながら演奏することに抵抗感を感じない児童が増えたのは、音符カードを用いたリズムづくりや、そのリズムを手拍子で表現する活動、そしてそのカードを使い「音楽づくりのための常時活動一覧表」(別紙)をもとにした活動を実践することで、休符の入ったリズムを読むことにも抵抗がなくなったからであり、音符と休符が入り交じった複雑なリズムも読むことができるようになったからだと考えられる。

本題材の最後には、お互いの作品を交換し、実際に演奏し合うことができるようになった。これは「常時活動」での取組を積み重ねることで、読譜、リズムの手拍子、音高の確認を経て表現するという、歌唱や器楽でも行っている「楽譜を読んで表現する」までの一連の流れを身に付けることができたからだと考えられる。この活動では、自分の楽譜を表現する際に自分のつくった楽譜の工夫をどう演奏するかを、演奏してもらった友達に伝えながら一緒に演奏することができた。このやりとりの中で、友達の作品を演奏する児童は、構成した音楽の思いや意図を感じる取ることはできたが、その思いや意図を実際の音楽として表現に生かすまでには至らなかった。自分たちの作品を演奏するだけでなく、友達の作品を演奏したり、作品に込められた思いや意図を伝え合ったりする活動を更に充実させるためには、自分たちの作品を仕上げるのと同様な時間が必要であった。

このように、作品を再現可能な楽譜として完成させることができたことで、自分の作品を表現するだけでなく、友達やグループで楽譜を交換しお互いの作品を演奏し合うことができるようになったと考える。そして、それぞれの作品のよさや面白さを感じ取ったり伝え合ったりすることや、思いや意図を共有し合うことにもつながったと考える。

2 実践授業[2] 2年生

(1) 思いや意図をもつ場面<テーマ設定と活動の見通し>

① 結果

おはやしづくりに取り組む際、「自分たちのだいすきな おはやしをつくらう」というテーマで学習をスタートした。アンケートの結果から、多くの児童が楽しみだと答えた反面、「難しそうだ」「できるかどうか心配」など、不安を感じている児童もいた(図22)。その後、自分たちのおまつりなので、『〇〇まつり』の〇〇の部分で考えた。自分たちで設定したテーマから言葉を想起する場面では、「常時活動」で行った言葉あそびの要領を取り入れることができ、

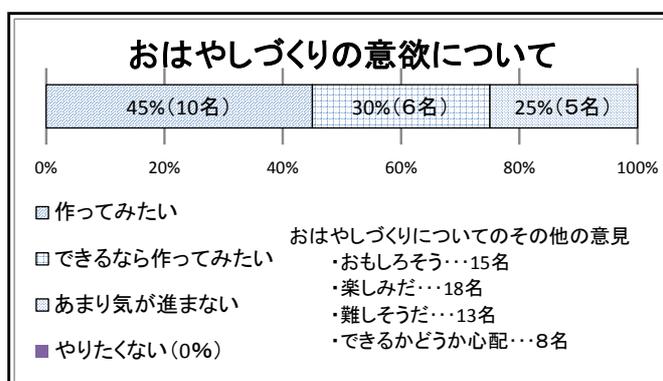


図22 おはやしづくりに関する意欲についてのアンケート

1小節4拍分の長さのおはやしの言葉を選ぶことができた。おはやしのテーマは「くだもの」「おかし」「ハロウィン」「秋」「学校」など、自分たちに身近なものや季節に関係したものをテーマに掲げた。グループのテーマにあった言葉を想起した後、色や形、大きさや好き嫌いなど、そのものの感じや様子をイメージできる言葉を付け加えた。

抽出児童Cは、学校をテーマにして言葉を考える際、始めに「ガッコウ」と記述し、その後の言葉を続けられずに悩んでいた。そこで「前(常時活動)やってみるに、学校で何をしたりどんな気持ちになったりするか考えて言葉を入れてね」と投げかけると、ワークシートの八分音符一つ分の枠八つの中に「たのしい」と記述した(図23)。

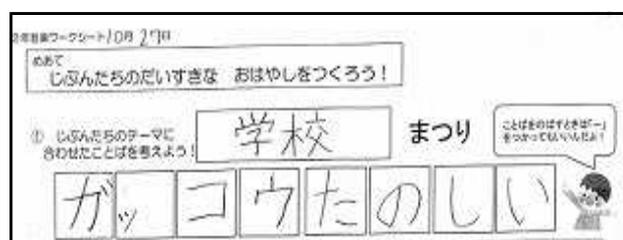


図23 抽出児童Cの考えた言葉とリズム

抽出児童Dは、フルーツをテーマにして言葉を考える際「みかん」を選び、拍に合わせるため「みかんは」と変えて記述した。抽出児童Cと同様に、その後続ける言葉をどうするか悩んでいた。そ

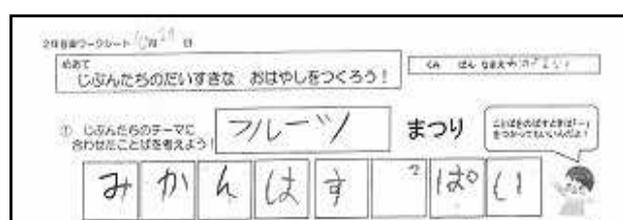


図24 抽出児童Dの考えた言葉とリズム

こで「前（常時活動）やったみたいに、みかんの味や色、見た感じなどから言葉を考えて入れてみたらどうだろう」と投げかけた。するとワークシートの八分音符四つ分の枠の中に「すっばい」と記述した（前ページ図24）。

抽出児童A Bともに、「常時活動」での活動を想起したり取り入れたりすることで、拍に合ったおはやしづくりの歌詞を考えることができた。

② 考察

音楽づくりのテーマを自分たちで決める際、「常時活動」での経験を想起してから活動に取り組むようにしたことで、おはやしづくりは難しいのではないかと感じていたイメージを払拭し、教師が準備したテーマを大幅に上回る数のテーマを考えることができたことにつながったと考える。アンケートに音楽づくりについて「不安を感じている」と答えた児童がいたのは、完成したおはよしの形やそれに至る方法が分からず、おはやしづくりへの見通しがもてなかったからである。この児童に、今回のおはやしづくりには「常時活動」で積み重ねた言葉あそびやリズムあそびが活用でき、簡単にできるんだということを伝えると、「なーんだ」「そうだったんだ」と安心した様子を見せた。このことから、音楽づくりに対して不安を感じていたのは、音楽づくりの経験がなかったことや、どのように進めていけばいいか分からなかったことが理由として考えられる。「前にやったときのように」という一言を児童に投げかけて「常時活動」での経験を想起させることで、リズムと言葉を組み合わせた旋律の形とそれに至る方法などの見通しをもつことにつながったと考える。

抽出児童C Dともに、歌詞を考える際には「常時活動」のリズムあそびで行った「常時活動」を想起できるよう「前（常時活動のとき）と同じように考えたの？」と声かけをした。この問いかけに「うん」と答え、その後の取組もスムーズに行えたことから、おはやしづくりの拍に合わせた歌詞を想起することや歌詞に合わせたリズムを想起することに、「常時活動」での経験を生かすことができ、おはやしづくりの見通しをもつことができたと考えられる。

(2) 思いや意図を音楽に表す＜音楽の構成と表現の工夫＞

① 結果

音符の読み方とリズム打ちを関連付けるために、「常時活動」では「音楽づくりのための常時活動一覧表」（別紙）をもとにして、四分音符や八分音符、四分休符や八分休符の組合せでつくった音符カードを、ランダムに並べてリズム打ちした。このリズム打ちの手拍子を正確に行える児童が、学級で約8割程度であった。できあがったリズムの組合せの難易度にもよるが、ほとんどの児童が手拍子できるときもあった。

抽出児童Cは、『ガッコウ』と『ガッコー』のどちらにするか悩んだ結果、『ガッコウ』を選んで記述した。促音の入る言葉を選んでいため、手拍子をしながら記述するよう促した。その後、考えたリズムを音符カードで表す際に、「ガッコウはタッタだから…」と言いながら、自分の考えた歌詞に合った音符カードを選択し、ワークシートを完成させた（図25）。

抽出児童Dも同様に、「すっばい」と記述した。抽出児童C同様、促音を含む言葉を選んでいため、手拍子しながら考えるよう促した。

すると、『すっばい』だから『タッタ』だな」と読んで手拍子しながら記述した。音符カードを選ぶ際に「タッタ」にするにはどのカードを選ばばいいかを尋ねたところ、必要なカードを間違えずに選び、ワークシートに貼り付けて完成させた（次ページ図26）。また、抽出児童C Dどちらのグループも、自分たちでおはやしを並べる順番を考え、グループのおはやしを完成させることができた。その際、「常時活動」で取り組んだ「音楽の仕組み」の「呼びかけ」や「反復」を生かし、一人の児童の演奏に続いてグループ全員でそれをまねする活動を行った。抽出児童Cに難しかった



図25 抽出児童Cのつくったおはやし

かどうか尋ねると、「いつも（常時活動）みたいにできたよ」と答えた。

実際の音楽づくりでは、リズムづくりで使った音符カードを縮小し、ワークシートに直接貼れるサイズにして活用した。ワークシートへの記述の流れは、「常時活動」での取組の流れを生かし、「歌詞→手拍子→音符カード」となるようにした。ワークシートに記述する際は、自分で考えた「おはやしの言葉」を記述し、その歌詞に合ったリズムを音符カードを並べることで表した（図27）。「おはやしの言葉」は、テーマから想起したひらがな4文字の言葉に、色や形・味やそのものの様子を表す言葉を付け加えたものとした。つくったおはやしは、言葉とリズムを組み合わせた「ことばのおはやし」と「ド・レ・ファ」の音とリズムを組み合わせた「音のおはやし」の二種類とした（図28）。「音のおはやし」づくりでは、使用する音を「ド・レ・ファ」の三音に限定し、同じ音を3回続けて使わないようにした。また、「音楽の仕組み」は一対一や一対複数でやりとりをする「問いと答え（掛け合う形式や呼びかけ）」や同じフレーズをまねする「反復」に限定した。できあがったおはやしを演奏する際には、「ことばのおはやし」や「音のおはやし」だけをグループでつなげて表現したり、誰かの演奏をみんなだまねをして演奏する「呼びかけ」の仕組みを取り入れて表現の工夫をしたりした。

② 考察

机間指導をしながら確認していったところ、ほとんどの児童が歌詞を言いながら手拍子をし、音符カードを選択していたことから、「常時活動」での活動を生かしておはやしづくりに取り組むことができたと考えられる。

抽出児童CDともに促音を含む言葉が入っていたにも関わらず、八分休符を含む音符カードを選んでリズムづくりができたのは、「常時活動」で促音を含む言葉を扱ったリズムあそびを経験していたからだと考える。カード選びをしている際、抽出児童Cに「間違えずに選べてすごいねえ」と賞賛すると、「いつもやってるのと同じだから簡単だよ」と答えたことから、「常時活動」での取組が音楽の構成に生かされていることが分かる。

「常時活動」に取り組み始めた当初は、四分音符や四分休符だけでリズム打ちをしてきたため、「たっ」や「きゃ」などの言葉には四分音符を当てはめていた。二学期に扱う教材の「山のポルカ」（教育芸術社『小学生の音楽2』P.27）では、八分休符と八分音符を組み合わせた「ンタ（ッタ）」のリズムを使ったリズム表現が含まれていた。このリズムが出てくる前に、新しく八分休符を組み合わせた音符カードを取り入れて「常時活動」のリズムあそびを積み重ねた。その際、「八分音符・八分休符」の組合せを「タッ」と読み、「八分休符・八分音符」の組合せを「ンタ」と読むこととした。これにより、今まで四分音符で表すしかなかった促音や拗音のある言葉を、自然な形で八

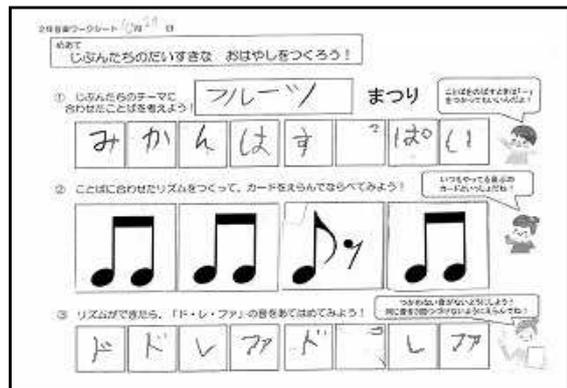


図26 抽出児童Dのつくったおはやし

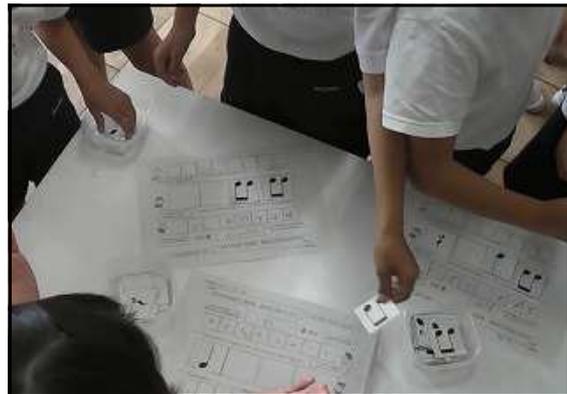


図27 カードでリズムづくりをする様子



図28 「ことばと音」二種類のおはやし

分休符に置き換えてリズム表現に生かすことができるようになったと考えられる。さらに、促音や撥音を音符で表現できるようになったことから、児童の発想した言葉のほとんどを、言葉で表したリズムや手拍子でのリズム表現にすることができるようになったと考えられる。また、ワークシートの記入の流れを「常時活動」での取組を生かし、「歌詞→手拍子→音符カード」となるようにしたことで、歌詞をリズムへと変換するための思考の流れがスムーズにすることができたと考える。そして、「ガッコウ」や「すっぱい」を「タッタタ」と変換するような、言葉とリズムを表す言い方を関わらせた活動を「常時活動」で積み重ねてきたことにより、実際の音楽活動に「常時活動」で経験した感覚を取り入れることができるようになっていたと考える。

授業の中では「クレープ」や「スイーツ」のように、二拍にまたがる歌詞が出てきたため、手拍子から音符カードへつなげることができなかった児童もいた。これら「常時活動」に使用した音符カードの組合せではつくりえないリズムについては、教師が個別に歌詞に合ったリズムのカードを用意しておいたことで、児童の発想を生かした表現につなげることができたと考えられる。

「常時活動」では、「反復」や「問いと答え」の「呼びかけ」や、掛け合う形式を取り入れたリズムづくりの活動を行ってきた。この活動を生かし、自分たちのつくったおはやしを組み合わせる際、「音楽の仕組み」を取り入れて表現を工夫していこうと考えた。しかし、今回のおはやしづくりで、取り入れる「音楽の仕組み」を児童に選択させずに教師の側で限定したのは、2年生の発達段階として、児童の発想で「音楽の仕組み」を取り入れていくことが難しいと考えたからである。一人の児童の「ことばのおはやし」を一对複数で演奏する「呼びかけ」の形式を取り入れたり、それを「音のおはやし」でも同じようにやってみたりするなどの活動を意図的に設定して行うことで、低学年の児童でも「音楽の仕組み」を生かした表現のよさや面白さを、「常時活動」のときと同様に感じ取ることができたと考える（図29）。このように、「音楽の仕組み」の取り入れ方を教師の側で設定することにより、「音楽の仕組み」を取り入れて表現したときのよさや面白さを、意図的に実感できるようにすることが低学年の児童にとって効果的であったと考える。そして、グループ全員の「ことばのおはやし」のみ、あるいは「音のおはやし」のみをつなげて演奏することで、音楽を構成したり表現の工夫をしたりした曲の雰囲気を感じることができ、思いや意図を表した音楽を表現することができるようになったと考えられる。



図29 呼びかけの工夫を演奏する様子

(3) 思いや意図を共有し合う場面<楽譜としての表記と伝え合う活動>

① 結果

四分音符や八分音符、四分休符や八分休符の組合せでつくった音符カードを活用した「常時活動」では、リズムづくりやリズム打ちを行う際、音譜の読み方を統一し、手拍子するリズムと音符の読み方を関わらせる活動を積み重ねた。

「ことばのおはやし」と「音のおはやし」を組み合わせ、グループのおはやしを完成させた。児童が演奏したい方のおはやしどちらかをグループのふしに取り入れる

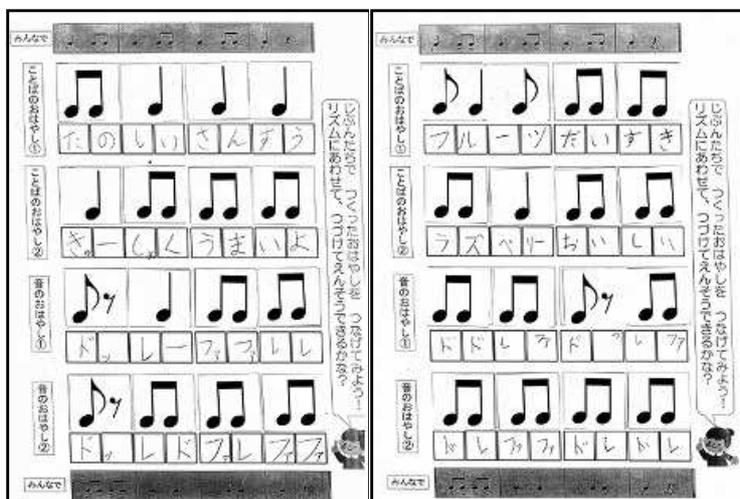


図30 グループの楽譜（左：抽出児童C 右：抽出児童D）

ことで、言葉とリズムによるおはやしの掛け合いと、音とリズムによるおはやしの掛け合いを、自分たちの演奏に取り入れることができた（前ページ図30）。

抽出時Cは、自分たちのつくるおはやしの前後に演奏する「もとなるおはやし」を演奏する場面で、「これはタアタタって読むんだよね」と言いながら、音符と共に記述された「ドンカカ ドンカカ ドンカカ ドン」のリズムを、「常時活動」で統一した音譜の読み方を使い「タアタタ タアタタ タアタタ タア」と読み替えながら表現した。抽出児童Dも同様に、八分休符の含まれるリズムを「ンタタア」と読みながら手拍子していた。この児童は、おはやしづくりの前に扱った教材の「山のポルカ」（教育芸術社『小学生の音楽2』P.27）の演奏でも、八分休符と八分音符を組み合わせた「ンタ（ッタ）」のリズムを使ったリズムを「ンタタア」と読んでリズム打ちできていた。

抽出時CDともに、「もとなるおはやし」を演奏する場面では、統一した読み方を生かしながら自分で楽譜を読み、手拍子をしたり楽器を使って演奏したりすることができた。また、友達のつくったおはやしを演奏し合う場面では、友達のつくったその楽譜を見ながら、一緒に演奏することができた。また、他のグループがつくったおはやしを演奏し合う場面でも、自分たちで楽譜を読んだり相談し合ったりしながら、他のグループの演奏を再現することができた。

今回のおはやしづくりを終えての感想では、ふしづくりについて86%の児童が「簡単だった・案外簡単だった」と答えており、その理由を「常時活動」での経験を生かしたおはやしづくりだったからだと答えていた。その他に、「友達のつくったおはやしや他のグループの作品を演奏することが難しかった」「上手に演奏してもらえたのでうれしかった」というコメントを書いている児童がいた（図31）。

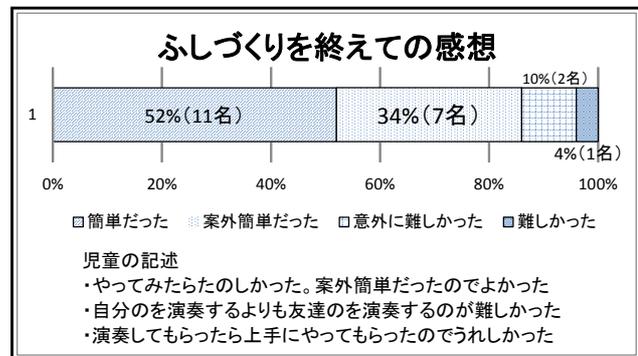


図31 おはやしづくりについてのアンケート結果

② 考察

「ことばのおはやし」と「音のおはやし」を組み合わせ、グループのおはやしを完成させた際、自分がつくった「ことばのおはやし」か「音のおはやし」のうち、自分が演奏したい方を選び、グループのワークシートに記述したことで、自分の作品が必ずグループの作品に反映されることにつながったと考える。また、演奏する際、グループの中で「ことばのおはやし」と「音のおはやし」をペアにして表現することで、お互いの演奏を「反復」させて表現することができ、「常時活動」で経験した「音楽の仕組み」を取り入れた表現の工夫につなげることができたと考えられる。また、同じ楽譜を一斉に演奏する合奏ではなく、グループ内で演奏の分担をして複数で演奏したり、違うふしを複数で演奏し合っ一つ一つの曲を演奏したりするような表現の工夫をすることで、「常時活動」で経験した「音楽の仕組み」が生かされてはいるものの、いつもとは一味違った曲の雰囲気味わいながら、表現のよさや面白さを実際の音楽表現で感じ取ることができたと考えられる。そして、この活動により、自分のつくったおはやしのよさや面白さを表現し、お互いの作品のよさや面白さを伝え合う喜びを味わうことで、思いや意図を共有し合うことにつながったと考える。

抽出児童Cが、「もとなるおはやし」を演奏する際、教科書に「ドンカカ」と書いてある楽譜を「タアタタ」と読み替えて手拍子をするのができたのは、「常時活動」で取り組んだ音符の読み方が定着し、それを実際の表現活動の中に取り入れることができるようになっていたからだと考えられる。

また、抽出児童Dがこれらの読み替えを行うことができたのは、抽出児童Cと同様「常時活動」での経験を積み重ねてきたことが理由として考えられる。しかし、音楽づくりに取り組む前から、歌唱教材の譜読みに「常時活動」での楽譜の読み方を取り入れることができていることから、歌唱や音楽づくりなど、音楽活動の様々な場面に、「常時活動」での経験を生かすことができるように

なっていたと考えられる。

今回の「おはやしづくり」では、ワークシートに「常時活動」で活用した音符カードと同様のカードを貼り付けることで、音符を書くことの難しい低学年でも、きちんとした楽譜のように見る作品に仕上げることができた（図32）。また、ワークシートに貼り付けた音符カードの下に「ド・レ・ファ」の音を記述できるように工夫したことで、音符と音高を関わらせ、鍵盤ハーモニカでの演奏につなげることができた（図32）。そして、



図32 カードを貼り付けて楽譜を完成させる様子

自分でおはやしの言葉とリズムを表現することや、自分で音高を設定するなど、「常時活動」と関わらせたおはやしづくりを経験することで、他のグループが組み合わせて完成させた楽譜を演奏する際にも、その楽譜ができあがるまでの一連の流れを理解することができた（図32）。その結果、他のグループの作品を表現する際には、自分たちがつくったおはやしを表現した経験を生かした演奏をすることができるようになったと考えられる。おはやしづくりを終えた後のアンケートに、簡単だったと感じたことの原因を、「『常時活動』での経験を生かしたおはやしづくりが分かりやすかったから」と答えていたことから、「常時活動」での経験を実際のおはやしづくりに生かすことができるようになっていたと考えられる。

Ⅶ 研究の成果と課題

1 成果

- 「音楽づくりのための常時活動一覧表」（別紙）をもとにして「常時活動」に取り組むことで、「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」を取り入れた音を音楽へと構成する活動を、低学年から高学年まで系統的に設定することができた。これにより、「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」の働きが生み出すよさや面白さを、音楽に関する言葉を使って理解し、自然な形で感じ取ることができた。
- 音楽を構成するそれぞれの段階で、「常時活動」の内容を生かした音楽づくりを進めてきたことで、低学年では〔共通事項〕に示された「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」の働きが生み出すよさや面白さを表現に取り入れることができた。さらに高学年では、曲をつくった児童個人のもつ思いや意図を実現するために、音を重ねたり組み合わせたりして表現するような、複数の児童で演奏するための「音楽の仕組み」を取り入れた音楽を構成することができるようになった。
- 音符カードをもとにした「常時活動」に取り組む、譜読みやリズム打ちの活動を積み重ねることに加え、自分のつくった音楽を音符で表現していくための授業の展開やワークシートの工夫をすることにより、低学年においては構成した音楽を音符カードを用いて記録することができ、高学年では自分で構成した音楽を音符で記述することができるようになった。これにより、自分たちで構成した音楽を、図や記号などを用いた図形譜ではなく、再現可能な楽譜として記録することができ、実際の音楽を介してお互いに演奏し聴き合う活動に発展させることができた。

2 課題

- 「音楽づくりのための常時活動」は、〔共通事項〕に示された内容をすべて網羅し、それに関わる具体的な活動例を示すことができたが、これらの活動が音楽づくりでの活用にとどめることなく、歌唱や器楽・鑑賞などの他領域で活用できるよう、さらに構成を考えたり内容を充実させていく必要がある。

- 音楽づくりの活動をできる限り分かりやすく設定し、言葉が音楽へと構成されていく流れについての見通しがもてるような活動で音楽を構成できるようにした。しかし、思いや意図を音楽に表す場面では、「常時活動」での取組を複数組み合わせることにより、複雑化してしまう部分があった。言葉を発想したり操作したりするような音楽と関わらせにくい活動を、学級活動や総合的な学習での取組を生かすことで簡略化し、音楽を構成したり表現を工夫したりする場面をさらに充実させていく必要がある。
- 自分で構成した音楽を表現する際、自分の思いや意図が聴いている相手に伝わるのが重要である。相手に伝わる表現の工夫や演奏としての表現ができるように、歌唱や鑑賞など表現領域全体を通じて、思いや意図を共有し伝え合う活動をさらに充実させていく必要がある。

Ⅷ 今後の取組と音楽科が担う役割について

「音楽づくりのための常時活動一覧表」（別紙）に基づいた「常時活動」は、低学年から高学年までの系統性を重視し、「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」の働きが生み出す音楽のよさや面白さを感じ取って、音楽づくりへと発展させていくことをねらった。この活動に様々なアイデアやヒントを取り入れながら、表現及び鑑賞につながる活動としていけるように、歌唱や器楽・鑑賞に関わらせた「常時活動」を追加していく必要がある。また、「常時活動」を音楽づくりだけでなく、表現及び鑑賞などとの関連を図り、音楽の授業の中での位置付けを明確にすることで、学校全体で取り組めるような指導計画の作成及び題材構成を工夫していく必要がある。そして、テーマ設定や言葉集めなどの音楽的な活動と関わらせにくい内容を、総合的な学習の時間と連携して実践したり、作品を発表する場の設定を学級活動や学習発表などに関わらせたりすることで、音を出して試行錯誤する時間や実際に表現してよさや面白さを感じ取る時間を確保するだけでなく、年間を通して行う題材として大きなテーマを設定した音楽づくりを行うことができるようになる。さらに、ふしに合わせた伴奏づくりができるようにするため、音の重なりや和声の響きに関わる「常時活動」を充実させていくことで、旋律と和音の関係に気付いたり、ふしに合った伴奏を考えたりすることにつながり、伴奏を取り入れたふしづくりに発展させていくことができるようになる。

今回の研究を通して、学校での音楽活動は、個人での表現・鑑賞もあるが、友達との関わりの中で取り組んでいく活動がほとんどであることを改めて感じた。表現することと人が関わることは密接につながっており、思いや意図を表現するならば、それを伝える相手がいれば、その相手に自分の思いや意図が伝えることができ初めて、思いや意図を相互に伝え合うことができるようになる。そこには、音楽活動を通した音によるコミュニケーションが存在している。音楽に関する言葉を使い、実際の音楽を介し、音によるコミュニケーションを充実させることが、思いや意図を相互に伝え合うことの充実につながっていく。

このように、実際の音楽を介して、自己のイメージを表現に生かした理由をはっきりと意識できることにより自己理解力が、相手の表現している思いや意図に気付くことができるようになることで他者理解力が育まれる。今回の実践でも、他者との共感を積み重ねることができるようになったことで、美しいものやすばらしいものに素直に感動できる心や、相手のことを理解して思いやることのできる心を育てることにつながり、豊かな人間性を育むことができた。これが、音楽科における生きる力を育むということであり、この生きる力を育むことこそ、今後の音楽科が担うべき役割であると考えている。

<参考文献>

- ・高倉 弘光 著 『音楽 身体で感じる授業づくり 豊かな感性が支える確かな力』

東洋館出版社（2005）

- ・金本 正武 編・著 『新学習指導要領を生かした音楽科の授業』 小学館 (2001)
- ・関根 朋子 編 『ふしづくりで決まる音楽能力の基礎基本』 明治図書 (2005)
- ・教芸音楽研究グループ 編 『音と言葉で子どもがつながる』 教育芸術社 (2013)
- ・教芸音楽研究グループ 編 『子どもの工夫が見る音楽づくりの事例集』 教育芸術社 (2013)
- ・田中 耕治 序 香川大学教育学部附属高松小学校 著 『パフォーマンス評価で授業改革』
学事出版 (2013)
- ・西岡 加名恵 編著 『逆向き設計で確かな学力を保证する』 明治図書 (2008)
- ・初等中等教育局教育課程課 『中等教育資料』平成24年12月号 学事出版 (2012)

<担当指導主事>

福島 桂 足達 哲也